

紙上講座 Ⅲ

伝えたい ふるさと東 2

あべのむねとう

安倍宗任伝説(1)

藤井 実さん(東町花輪)

あすま

古くから東には、安倍宗任にまつわる伝説が根強く残り、『勢多郡東村誌』にも掲載されている。

※安倍宗任とは、平安時代後期の人物。奥州(陸奥国)を支配下ににおいた安倍氏嫡子貞任(さだとう)の弟。兄貞任は厨川の戦いで討死。

※平安時代の後期「前九年の役(一〇五一〜一〇六二)」で、源頼義・義家父子に敗れ捕虜となった安倍宗任が、都に護送された。

この時、宗任の家臣は黒川郷に留め置かれ、土着したという。

これが東に伝わる安倍宗任伝説。

※源頼義は源頼朝の五代前の人物。義家の父。義家は通称八幡太郎で知られる

『東村郷土史』には「(平安時代)後期。源義家、奥州の安倍氏を討ち其の降附者を率い凱旋の途次本村を通過。

その一部を此処に土

土着せしめたという傳説を残す」とある。

※平安時代の後期「前九年の役(一〇五一〜一〇六二)」で、源頼義・義家父子に敗れ捕虜となった安倍宗任が、都に護送された。

この時、宗任の家臣は黒川郷に留め置かれ、土着したという。

これが東に伝わる安倍宗任伝説。

※源頼義は源頼朝の五代前の人物。義家の父。義家は通称八幡太郎で知られる

『東村郷土史』には「(平安時代)後期。源義家、奥州の安倍氏を討ち其の降附者を率い凱旋の途次本村を通過。

その一部を此処に土

※東の地に「土着せしめた」ということは、黒川郷は、源頼義の領地であつたからであろう。

この伝説は『新田老談記』が基になつている。

※『新田老談記』とは、「天正十八年(一五九〇)に、豊臣秀吉が小田原城の北条家を攻めた時、北条家に味方して敗れた。

上野国新田金山城主由良信濃守国繁は現在の茨城県の牛久に左遷された

その直後に、身近な家臣に国繁が語ったものを家臣が筆記したものと いわれる。

その『新田老談記』に次のように記されている。

天正七年(一五七九)、由良国繁が黒川郷を攻め、この和談の時黒川衆が由良勢に釈明する場面。

※由良国繁は太田金山城主。国繁の父成繁は天正元年(一五七三)桐生城を陥落させ桐生氏を滅ぼした。

悪沢・松島家の由来を御説明いたします。

天喜五年(一〇五七)年の春、安倍貞任が九州に流される時、上下七百三

年代的には文禄年間(一五九二〜一五九六)とものとされている。

その『新田老談記』に次のように記されている。

天正七年(一五七九)、由良国繁が黒川郷を攻め、この和談の時黒川衆が由良勢に釈明する場面。

※由良国繁は太田金山城主。国繁の父成繁は天正元年(一五七三)桐生城を陥落させ桐生氏を滅ぼした。

悪沢・松島家の由来を御説明いたします。

天喜五年(一〇五七)年の春、安倍貞任が九州に流される時、上下七百三

年代的には文禄年間(一五九二〜一五九六)とものとされている。

その『新田老談記』に次のように記されている。

天正七年(一五七九)、由良国繁が黒川郷を攻め、この和談の時黒川衆が由良勢に釈明する場面。

※由良国繁は太田金山城主。国繁の父成繁は天正元年(一五七三)桐生城を陥落させ桐生氏を滅ぼした。

悪沢・松島家の由来を御説明いたします。

天喜五年(一〇五七)年の春、安倍貞任が九州に流される時、上下七百三

年代的には文禄年間(一五九二〜一五九六)とものとされている。

その『新田老談記』に次のように記されている。

天正七年(一五七九)、由良国繁が黒川郷を攻め、この和談の時黒川衆が由良勢に釈明する場面。

※由良国繁は太田金山城主。国繁の父成繁は天正元年(一五七三)桐生城を陥落させ桐生氏を滅ぼした。

悪沢・松島家の由来を御説明いたします。

天喜五年(一〇五七)年の春、安倍貞任が九州に流される時、上下七百三

年代的には文禄年間(一五九二〜一五九六)とものとされている。

その『新田老談記』に次のように記されている。

天正七年(一五七九)、由良国繁が黒川郷を攻め、この和談の時黒川衆が由良勢に釈明する場面。

※由良国繁は太田金山城主。国繁の父成繁は天正元年(一五七三)桐生城を陥落させ桐生氏を滅ぼした。

悪沢・松島家の由来を御説明いたします。

天喜五年(一〇五七)年の春、安倍貞任が九州に流される時、上下七百三

十人が奥州からお供つかまつりました。

義家公が、『箱根山を越えて大勢を連れて行くことはできない。お供の人数は百人までにせよ』との仰せでした。

大部分の者は、涙を流しながら貞任にお分かれいたしました。

その際、貞任が、『行き先の国は、遙か彼方の国と聞いている。』

奥州への便りの中継ぎのために、このあたりに住め』と仰せ付けになる。

松島・悪沢とその家人

一族百人ばかりをここに残し置かれ、残りの者は、全員奥州に帰って行きました。

義家公がその場で御朱印をしたためられ、末代までこの谷合の地をすべて住居として拝領しました。

それ以来、この地に何代にもわたって住んで参りました。

※安倍貞任とあるが、

兄貞任ではなく、
弟 宗任であろう。

また『関八州古戦録』
には次のように記されている。場面は『新田老

老談記』と同じ場面である。

そもそも鎮守府將軍源頼義、奥羽九年の役に宗

任、貞任の兄弟を討ち、

京へ報告せんがため長男八幡太郎義家を、代官として差し向けた。

この折、降参の夷賊七百三十余人が旧主との別れを惜しんでこの国（上野国黒川郷）まで来た。

その時、義家が『かねて

朝廷で定められたる数、百人以上を連れることができない。これからみんな奥羽へ戻れ』と言われた。

その中、松島、愛久沢

の党八、九十人は、今後、奥羽への文書の飛脚の中心に残ることになった。

とりあえず桐生家の配下として安堵を得たが、本来は鎮守府將軍源頼家の旗下でだれの命令も受けずに生きている者だ。というのが、先祖からの言い伝えである。

※『関八州古戦録』は
江戸時代中頃の享保十一年（一七二六）、横島昭武によつてに著された軍記物

※横島昭武は、江州膳所（現滋賀県大津市）の国学者

※黒川郷は、源頼義のお墨付き（不輸不入の権）を持っていた地であった。